

2022年度 第13回 信徒セミナー

テーマ：体験！神学校 ～じっくり学ぶ旧約聖書～

「編まれた詩編を読み解く」

小林洋一

はじめに

I 詩編とは

II 詩編の種類

III 詩編の編集

IV 編集方針

おわりに

補遺：報復の祈りについて

はじめに

○今回の詩編の学びでは、詩編が編集されたものであるとの前提に立って、詩編の構成や編集方針をテーマにして学ぶ。

○詩編は無作為の寄せ集めではなく、一定の神学的アイデアのもとで編集された (G. Wilson, 1985)。

I 詩編とは

○キリスト教会は、歴史的に詩編を賛美歌、祈祷書（神の前で自分自身をより良く表現するために言葉を借りる）あるいは、黙想の書一丸暗記して、口で唱えて暗唱するテキストとして使用。

○古代イスラエルでも、完成した詩編は讚美歌、祈祷書、黙想の書として使用。

○イエス・キリストも詩編に親しんでいた様子が、ルカ 20:41-44 やマタ 27:46 || マコ 15:34 から伺える。

○坂本九が歌って有名になった「幸せなら 手をたたこう」は、神の民が民族性や地理の境界性を打ち破って広がることを賛美する詩 47:2 の「すべての民よ、手を打ち鳴らせ。喜びの歌声で、神に歓呼の叫びを上げよ。」を参考にしたもの（『朝日新聞』（2013/2/23）、be 版、「うたの旅人」）。（聖句の引用は、特に断らない限り、すべて「協会共同訳」）

○神への信頼の告白の詩編の1つの詩編 23 編「主は私の羊飼ひ」は、多くの人に愛されてきた。

(詩 23)

¹ 賛歌。ダビデの詩。

主は私の羊飼ひ。(יְהוָה רֹעִי アドナイ ロイー) 私は乏しいことがない。

² 主は私を緑の野に伏させ/(私を)憩いの汀に伴われる。

³ 主は私の魂を生き返らせ/御名にふさわしく、(私を)正しい道へと導かれる。

⁴ たとえ(私は)死の陰(צִלְמָוֶת ツアルマヴェト)の谷

を歩むとも/私は災いを恐れない。あなたは私と共におられ/あなたの鞭と杖が私を慰める。

⁵ 私を苦しめる者の前で/あなたは私に食卓を整えられる。私の頭に油を注ぎ私の杯を満たされる。

⁶ 命あるかぎり/恵みと慈しみが私を追う。私は主の家に住もう/日の続くかぎり。

○新共同訳は、1節を「主は羊飼ひ、わたしには何もかけることがない。」と「私の羊飼ひ」の「私」を省いた。(translation=翻訳は traitor=裏切り者)。

○詩編 23 編は葬儀の詩編?

6 節の

⁶ 命あるかぎり/恵みと慈しみが私を追う。

私は主の家に住もう/日の続くかぎり。

また、4 節の

⁴ たとえ(私は)死の陰(צִלְמָוֶת ツアルマヴェト)の谷を歩むとも/私は災いを恐れない。あなたは私と共におられ/

が影響か?

○「死の陰の谷を歩む」は、「死」(מָוֶת マヴェト)と「陰」(צֶלַל ツェル)からなる合成語。しかし、死とは関係なく、「深い陰」、「深い闇」を意味する。

○十字架上でのイエスの叫び。「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」(マタ 27:46 || マコ 15:34) は、23 編のすぐ前の 22 編 2 節の言葉。

(詩 22:2)

² わが神(אֱלֹהֵי エリー)、わが神(אֱלֹהֵי エリー)/なぜ(לָמָּה ラマー)私をお見捨てになったのか(עַזְבוּתָנִי アザヴタニー)。私の悲嘆の言葉は救いから遠い。

(マタ 27:46)

⁴⁶ 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ (אֱלִי)、エリ (אֱלִי)、レマ (לָמָּה)、サバクタニ (שֶׁבַקְתָּנִי シェバクタニー)。」これは、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という意味である。

○「エリ」はヘブライ語の詩 22:2 と一致するが、アラム語の「ヘブライ語風表現」で、アラム語のタルグムの詩編と一致している。マタイは人々が「エリヤ」を呼んでいる (マコ 15:35 || マタ 27:47) からマルコの「エロイ」を「エリ」に修正した? (ルツ、2009)。

(マル 15:34)

³⁴ 三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ (אֱלֹהֵי) エラヒー)、エロイ (אֱלֹהֵי) エラヒー)、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という意味である。

(詩 22)

⁵ 私たちの先祖はあなたに信頼した (בָּטַח בָּתָּאハ)。

彼らは信頼し (בָּטַח בָּתָּאハ)、あなたに救われた。

⁶ 彼らはあなたに叫び、救い出された。

彼らはあなたに信頼し (בָּטַח בָּתָּאハ)、恥を受けることはなかった。

³¹ 子孫は主に仕え/

わが主のために代々に語り伝える。

³² 彼らは来て主の義を告げ知らせる/

生まれ来る民に、「主がなされた」と。

○この嘆きの叫びがある詩編 22 編の後に何故このような信頼の告白の詩編 23 編が来るのか。

○22 編の内容は、2 節「わが神、わが神/なぜ私をお見捨てになったのか。」の嘆きにも関わらず、5-6 節の「信頼」(3 回) からわかるように、この詩編は「信頼」の歌でもある。

○信頼するがゆえに、「わが神、わが神」叫んでいる、と言える。

○詩 22:31-32 節に、「わが主のために代々に語り伝える」、「主の義を告げ知らせる」とあるので、それを受けて 23 編の信頼の告白が来ている。

○詩編の配列は、詩編を最終的にまとめた編集者による。このような詩編相互の関係性を探るのも今回の学びの目的。

1. 日本の詩歌との違い

○詩編と日本の詩歌との違いの1つは、詩編には自然を情緒的に捉える、あるいは自然を愛でることが極端に少ない。

○聖書には、自然は神の被造物であって、神を抜きにした中立的な「自然」という言葉はない。現代ヘブライ語では **טֵבָא** (テバ=自然)。

○聖書は、自然と対峙しても無条件で自然を愛でるのではなく、自然を創造された神、あるいは自然界における神によって創造された神的秩序を称えるということをしている(創造伝承にもとづく詩8、19、29、65、104参照)。

○詩編には、旧約聖書の2大神学伝承である創造伝承と歴史的救済伝承が出てくる。歴史的救済伝承では、詩78、106が上げられる。また創造伝承と歴史的救済伝承のモチーフが合体したものとして詩95、104(創造)と105(救済)、136がある。

○被造物である天と地が神の裁きにおいて証人として呼び出されることもある。

(詩50:4-6)

⁴神はご自分の民を裁くため/ 上なる天に、また地に呼びかける。⁵「私のもとに集めよ/私に忠実な者を/いけにえを供えて私と契約を結んだ人たちを。」⁶天は神の義を告げ知らせる/神こそが裁き手、と。 [セラ

○自然が出てきても、被造物(自然)が人格化され、神を賛美することになる。ただし、聖書が自然を決して敵対するものと見ているのではなく、親和的に見ている。

(詩98:7-8)

⁷海とそこに満ちるもの/ 世界とそこに住むものはとどろけ。⁸川という川は手を打ち鳴らせ。山々はこぞって喜び歌え/

(詩148:3-4、7-10)

³太陽よ、月よ/主を賛美せよ。輝く星よ、こぞって/主を賛美せよ。⁴天の天よ/天の上にある大水よ/主を賛美せよ。

.....

⁷地上から/ 主を賛美せよ。海の竜たちよ、すべての深淵よ/ ⁸火よ、雹よ、雪よ、霧よ/ 御言葉を成し遂げる激しい風よ/ ⁹山々よ、すべての丘よ/ 実を結ぶ

木よ、すべての杉の木よ/ ¹⁰ 生き物よ、すべての獣よ/地を這うものよ、翼ある鳥よ/

○環境問題に取り組む人から自然の宗教である神道と違ってキリスト教は、創 1:28 の地を「従わせよ」、「治めよ」から自然を支配・征服する対象、また敵対的なものと見ていると批判されてきた。

○詩 24:1 は、「地とそこに満ちるもの/世界とそこに住むものは主のもの。」と詠う。世界は神のものであり、人はあくまでも神の代理人として、神の創造の意図に従って調和と秩序ある世界の保持に仕える使命として「治めよ」(הָרַדּוּ ラダー=支配する)「従わせよ」(כַּבְּשׁוּ カバシュ=従属する)を捉えるべきである。

○創 1:1-2:4a の並行記事である創 2:4b-24 では、人がエデンの園の地(世界)を「耕し、守る」(創 2:15)者であり、動物は敵対ではなく、助け手となる存在と見られている(創 2:18-20)。

○これは、「従わせよ」を、「耕し(עָבַד アヴァド=仕える)、守る(שָׁמַר シヤマル=保護する)」の視点で捉えることを要求する。

○詩編は感傷的・情緒的な詩歌ではなく、第一義的に信仰で理解・共感されることを要求する詩歌。

○詩編は信仰共同体の理解と共感を求めるだけでなく、神の理解と共感を信じて詠われる。

○詩編が含まれる聖書は、信仰共同体の正典であるだけでなく、神の知恵、人の知恵が融合した人類の知恵の共有財。

○詩編は、生きた信仰、血の通った信仰が如何なるものであるかを教えてくれる。信仰についての学びを汲み出す偉大な宝庫。

2. 旧約聖書の3区分

○聖書は大きく旧約聖書と新約聖書に分かれ、前者が4分の3、後者が4分の1を占める。前者の原典はヘブライ語とアラム語、後者はギリシア語。

○近年、「旧約聖書」という言い方が、偏見と差別を醸成するという観点から、「ヘブライ語聖書」と呼ぶことが増えてきた。その場合、「新約聖書」も「ギリシア語聖書」、あるいは「キリスト証言集」と言ったりする。

○聖書が現在の形で成立したのは紀元後2世紀。古代の古文書。

○詩編は、すべてがヘブライ語で、アラム語の部分はない。アラム語が出てくるのは、ダニエル書(2:4b-7:28)、エズラ書(4:8-6:18, 7:12-26)、エレミヤ書(10:11)、創世記 31:47 の「ラバンはそれをエガル・サハドタ(עֵגְלָרָא וְשֶׁהָרִדָּא = 証の塚)と呼び、ヤコブはガルエド(גַּלְעָד = 証の塚)と呼んだ。」

○アラム語が一番多いダニエル書が書かれたのは、紀元前2世紀頃。この頃には、

アラム語が近東でリングフランカ (lingua franca=世界共通語) になっており、聖書を手にする人が、アラム語が混じっていても支障がなかった(イエス・キリストも、日常語として、ヘブライ語ではなくアラム語という世界共通言語を話していた)。

○ユダヤ教の経典であるヘブライ語聖書は、日本語の旧約聖書の配列とは異なり、「律法」(トーラー) (創一申) と「預言書」(ヨシュア—マラキ) と「諸書」(ヨブ、詩編、箴言、コヘレトの言葉、ダニエル、歴代等) の3区分配列。(図

①)

○תּוֹרָה (トーラー、単数女名詞)、נְבִיאִים (ネヴィーム、預言者たち)、כְּתוּבִים (ケトウヴィーム、諸書) がヘブライ語聖書の原題。ヘブライ語聖書とは、便宜上の名前。(図②)

○各区分のヘブライ語の頭文字をとって「タナハ」(תנ"ך) と呼ぶ。頭字語 (acronym)。

○初代教会時代(後1世紀)、この3区分は確立しており、3区分の最後となる諸書の代表格は「詩編」。

(ルカ 24:44)

⁴⁴ イエスは言われた。「私がまだあなたがたと一緒にいたときに、語って聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、私についてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてあることは、必ずすべて実現する。」

○「モーセの律法と預言者の書と詩編」とは、旧約聖書のこと。

○イエスの時代では、旧約聖書が律法、預言者、諸書と3区分で理解され、ヘブライ語聖書(BHS)のように諸書の先頭に詩編が置かれていた可能性がある。最初の書であったがゆえに、詩編(תהלים ティヒリーム)が律法、預言者の書のように第三区分の呼称であった可能性さえある(Croy, 2021)。

○なぜ詩編は第3区分の先頭に置かれたのか。①詩編の多くがメシアの原型と見られたダビデと結びつけられているがゆえに、詩編も預言書のように見られていた?

○新約聖書では、詩編の言葉がメシア預言の成就として多く引用されている(例えば、詩 2:7 || マタ 3:17、詩 22:9 || マタ 27:43、詩 22:19 || マタ 27:35 等)。

○3区分の順序は、ユダヤ教が律法を中心にして、その律法の適用としての預言書(者たち)を配置して、信仰生活の参考書として諸書を考えていたことを示す。

(図③)

○キリスト教の配列は、律法、歴史書、諸書、預言書となっていて、円ではなく、線的に聖書を捉えていて、歴史的救済史的。最後に預言書があるので、そこに新約聖書が接合しやすい配列。メシアによる救済の預言（旧約聖書）があつて、時至ってイエス・キリストにあつて預言の成就（新約聖書）があるとの考え。

○新約聖書で、「書いてあることは、必ずすべて実現する。」（ルカ 24:44）あるいは「言われていたことが実現するためであつた」（マタ 2:15、17、23 等）と書かれている。

○新約聖書は旧約聖書にネットワークを作つて、テキストを展開している。このようなテキストの関係性を「間テキスト性」(intertextuality) (M. テート、2001、アレン、2002)、あるいは「相互テキスト性」と言う。

○「間テキスト性」を詩編にも適応する。150 の詩編は、個々ばらばらで存在しているのではなく、1 書として相互に、何らかの内的関連性を持っている。

○1 書と捉えるがゆえに詩 80:14 の מִיַּעַר (ミーヤアル=森の) 宙づりの אֵין (アイン) が全体の文字の中心点であることをマークしている (E. Tov, 2012)。 (図④)

○間テキスト的読みは、個々の詩編を単独で理解するだけでなく、他の詩編との連関の中で理解しようとする。

II 詩編の類型

○詩編のヘブライ語の原題は תְּהִלִּים (ティヒリム、名詞「賛美」の複数形、動詞 הָלַל ハラル=誇る、ピエル形になると「賛美する」) の派生語、

הַלְלוּ־יָהּ (ハレルヤは、「あなたがたは主を賛美せよ」) の יָהּ (ヤ) は、יְהוָה (YHWH) 短縮形。

1. 表題による分類

○表題は編集句であつて詩編の本文を必ずしも反映していない。

(1) 賛歌

○表題に、「賛歌」(מִזְמוֹר מִזְמוֹר) は 57 回出てくる (3:1、4:1、5:1 等)。楽器の伴奏付きで歌われたようである。楽器は、角笛、豎琴、琴、タンバリン、シンバル、ラッパなどが使用された (詩 150、歴上 15:16, 16:4-6)。

○メロディー (旋律) は題名が書いてあつてもどのようなものか分かっていない。「シェミニトによる」(詩 6:1、12:1、歴上 15:21)、「シガヨン」(詩 7:1)、「ギティトに合わせて」(詩 8:1、81:1、84:1)、「アラモト調」(詩 46:1)。聖歌隊の賛美の覚え書きか (歴上 16:4-6、25:6、歴下 5:13-16) ?

○145 編 1 節にのみ「賛美」(תְּהִלָּה ティヒルラー、女性名詞) が出てくる。

○「セラ」(詩 3:2、9、4:3、5 等)は、歌う場合、または楽器伴奏に伴う何かの指示の可能性がある。「セラ」(סֵלָה)の語根を「サラル」(סָלַל)に見て、「声を高める」、「演奏を強める」の意味を考える人もいる。

(2) 歌

○表題に「歌」が出てくるもの(詩 45:1、46:1 等)。ただし、「歌」(שִׁיר シール)と「賛歌」(מִזְמוֹר ミズモール)と一緒に出てくるのも多くある(30:1、48:1、65:1 等)。

○15 個の「都に上る歌」(שִׁיר הַמַּעֲלוֹת シール ハツ・マアロート)(詩 120-134)のヘブライ語原文は、「上る歌」とあるだけで「都」はない。巡礼歌とも呼ばれる。

(3) ミクタム

○「ミクタム」(מִקְתָּם) (詩 16、56-60 の先頭節)は 6 回現れる。常に לְדָוִד מִקְתָּם (ミフタム レ・ダビッド=ダビデに対する(属する)のよう)に出てくる。しかし、意味は不明。

(4) マスキール

○「マスキール」は 14 回現れる(詩 32:1、42:1、44:1、45:1、47:8、52:1、53:1、54:1、55:1、74:1、78:1、88:1、89:1、142:1)。ただし、詩 47 では、先頭節ではなく、「優れた歌」と訳されて 8 節に現れる。

○「マスキール」(מִשְׁכִּיל)が「サハル」(שָׁכַל=慎重である、黙想する)の派生語と考えて、「教訓的」の意味を考える人もいる。「巧みな、芸術的」を意味するにとる人もいる。

(5) 祈り

○「祈り」の表題は 5 回現れる(詩 17:1、86:1、90:1、102:1、142:1)。嘆きの歌でもある。

○第 4 区分目の最初の詩編である 90 編には「祈り。神の人モーセの詩」(תְּפִלָּה לְמֹשֶׁה אִישׁ־הָאֱלֹהִים ティフィルラー レ・モシェ イーシュエ・ハ・エロヒーム=神の人モーセの祈り)とある。

○詩 17:1、86:1 の「祈り。ダビデの詩」の原題は、תְּפִלָּה לְדָוִד (ティフィルラー レ・ダヴィド=ダビデの祈り)。

○詩 102:1 の「苦しむ人の祈り」は原題 (תְּפִלָּה לְעַנִּי ティフィルラー レ・アニー)がそのまま訳されている。

2. 内容による分類

(1) ほめたたえ (賛美)

○本文中に「ほめたたえ」、あるいは「賛美」(מְפָאֵר מְפָאֵר) という言葉が現れる(詩 18:4、96:4、113:3、145:3 等)。ただ表題に「ダビデの賛美」(תְּהִלָּה לְדָוִד) ティヒルラー レ・ダヴィド) が現れるのは、145:1 だけ(協会共同訳は「賛美。ダビデの詩。」と訳出)。

○C・ヴェスターマン(2013)は、例えば、詩編 30 編は「報告的なほめたたえ、あるいは感謝の歌」と分類すべきもので、まず危急に対する回顧、次にそこから救いに対する賛美と感謝が報告的にあるいは告白的になされている、と理解している(その他、詩 9、18、31、32、34、40:1-12、66:13-20、92、116、138)。

(2) 嘆き

○嘆きは、個人の嘆き(詩 3、4、5、6、7、13、17 等非常に多い)と、民族の嘆き(詩 44、74、79 等)に分類される。

○個人の嘆きの場合でも、祭儀の場で歌われるために類型的であり公的性格を備えている。

(3) 信頼の告白

○神への信頼の告白を詠う(詩 23、27、62、63、71、131)。

(4) 悔い改め

○悔い改めの詩編としては、バト・シェバと関係したダビデの悔い改めの詩編ということで 51 編がよく知られている(その他、詩 6、32、38、102、130、143)。

(5) 王の詩編

○王の理想の支配を描くもので、終末的・メシア的に解釈されてきた(詩 2、18、20、21、45、72、89、101、110、132、144)。

(6) シオンの詩編

○神の住む神殿のあるシオンを賛美する(詩 46、48、76、87、84、122、132、137)。

(7) 即位の詩編

○ヤハウエが王であることをたたえる(詩 47、93、96-99)。

(8) 知恵の詩編

○箴言、コヘレトの言葉、ヨブ記などの知恵文学に特徴的な形式や主題を含んでいる。しかし、どれを知恵の詩編とするかについては学者の間で意見が分かれる（詩1、25、33、37、49、58、73、92、94等）。

3. 様式による分類

「アルファベットによる詩」

○日本の「いろは歌」のようなもの（詩9、10、25、34、37、111、112、119、145）（図⑤）。

○技巧的で、教訓的な内容が多く、詩全体の暗唱を容易にする意味もあったと思われる。

○アルファベット詩編である119編は詩編で1番長い（176節）。

¹⁰⁵あなたの言葉は私の足の灯私の道の光。

○日本バプテスト連盟発行の『新生賛美歌』131番「イエスのみことばは」はこの聖句に触発された讃美歌の1つ。

⁷¹苦しみに遭ったのは私には良いことでした。あなたの掟を学ぶためでした。

○この聖句は、神との関係で苦しみを覚えている。人が忌み嫌う、憎むべき相手であると思われるような「老・病・死」が、自分を神に近づけた、と理解するのに似ている。

○詩119の真ん中の節は、

⁸⁸あなたの慈しみ (דַּחַדְדָּ הֶסֶד) にふさわしく/私を生かしてください/あなたの口から出る定めを守れるように。

○詩編119編は律法を称える詩であるが、律法にふさわしくではなく、神の慈しみにふさわしく生きれるようにと願っている点で、中央に位置するにふさわしい聖句。すなわち、慈しみに生かされてこそ、神の言葉を守ることができると考えられる。

○119編の技巧的素晴らしさ。（図⑥）

○1-8節の先頭の言葉は全てアレフ (א) ではじまる。次の8節（9-16節）はベト (ב) と、そして次の8節（17-24節）ギンメル (ג) とヘブライ文字22文字の

すべてが8節ずつ先頭の言葉に現れる（頭韻法）。

○8節になっているのは、讃えられている律法が、「律法」（תּוֹרָה トーラー）を含めて「定め」（עֲדָתָא エドト）「諭し」（פְּקוּדִים ピクーディーム）「掟」（חֻקִּים フッキーム）「戒め」（מִצְוֹת ミツヴォト）「裁き」（מִשְׁפָּטִים ミシュパティーム）「言葉」（דְּבָרָא ダバル）「仰せ」（אִמְרָה イムラー）の8語の言葉で言い換えられているからだとされる（月本昭男、2020）。

Ⅲ 詩編の編集

（以下、次回）

参考文献（ABC順）

- グレアム・アレン（森田孟訳）『文学・文化研究の新展開－間テキスト性－』研究社、2002.
- ウルリヒ・ルツ（小河陽訳）『EKK 新約聖書註解Ⅰ/4 マタイによる福音書（26-28章）』教文館、2009.
- マーヴィン・E・テート（拙訳）「聖書解釈の一仕様としての間テキスト性（Intertextuality）」『西南学院大学神学論集－干隈移転記念号－』第58巻第1・2号合併号（2000.3）.
- 月本昭男『詩編の思想と信仰Ⅴ－第101篇から125篇まで－』新教出版社、2020.
- C・ヴェスターマン（大野恵正訳）『（改訂新版）聖書の基礎知識 旧約篇』日本基督教団出版局、2013.
- Croy, Casey K. *Sequencing the Hebrew Bible: The Order of the Books*. Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2021.
- Tov, Emanuel. *Textual Criticism of the Hebrew Bible*. Minneapolis: Fortress Press, 2012.
- Wilson, Gerald. *The Editing of the Hebrew Psalter* (ed.) J.J. M. Roberts. SBLDS 76; Chico CA: Scholars Press, 1985.